

# 小 論 文

医学部（医学科）

## 注 意 事 項

1. 「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。
2. この冊子は表紙を除き7ページである。
3. 「解答始め」の合図があったら、まず、掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数・下書き用紙枚数が、自分に配付された数と合っているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出ること。次に、受験番号・氏名を必ずすべての解答用紙の指定された箇所に記入してから、解答を始めること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に横書きで記入すること。

次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

### ヨーロッパのしたたかさ

訂正するとは、一貫性をもちながら変わっていくことです。難しい話ではありません。ほくたちはそんな訂正する力を日常的に使っているからです。

この点でうまいと思うのは、ヨーロッパの人々です。彼らを観察していると、訂正する力の強さに舌を巻かざるをえません。

新型コロナウイルス禍を思い出してください。イギリス人の「訂正」にはすさまじいものがありました。大騒ぎしてロックダウンをしたと思いきや、事態があるていど収まると、われ先にマスクを外していく。「自分たちはもともとコロナなんて大したことないと気づいていた」と言わんばかりです。「いや、そうだったかな」と思わずにはいられないですが、彼らはあたかもそれが当然だったかのように振る舞います。

日本人からすると「ずるい」と感じるかもしれません。スポーツでもしばしばルールチェンジが問題になっています。

それでもヨーロッパの人々はルールを容赦なく変えてくる。政治でも同じです。たとえば気候変動。少しまえまでドイツは、「脱原発」や「二酸化炭素排出量の削減」を高らかに掲げていました。ところがウクライナで戦争が勃発しロシアからの天然ガスの輸入が途絶えると、「やはり原発と石炭火力も必要だ」と言い出す。

これまで観光業でさんざん稼いできたフランスも、最近ではオーバーツーリズムを懸念し、「地元コミュニティと環境保護のために観光客数を抑制する」という新たな方針を打ち出しています。華麗な方向転換です。

ただ、ここで大事なのは、そのときに彼らが自分たちの行動や方針が一貫して見えるように一定の理屈を立てていることです。それはある意味でごまかしですが、そういった「ごまかしをすることで持続しつつ訂正していく」というのが、ヨーロッパ的な知性のありかたなのです。

ヨーロッパの強さは、この訂正する力の強さにあります。それはきわめて保守的でありながら同時に改革的な力でもあります。ルールチェンジを頻繁にすることによって、たえず自分たちに有利な状況をつくり出す。それなのに伝統を守っているふりもする。それはヨーロッパのずるさであると同時に賢さであり、したたかさなのです。

日本にも訂正する力がないわけではありません。

昔からよく指摘されているように、大陸の辺境に位置するこの国は舶来のものに目がありません。中国に接したら中国の文化を受け入れ、欧米がきたらこんどは欧米の文化を受け入れる。それは野放図なようであり、じつは肝心なところはまったく<sup>①</sup>言っていないほど変えていない。

たとえば名前です。朝鮮半島やヴェトナムでは中国文明の輸入とともに命名も中国風に変えてしまいました。他方ぼくたちはいまだに古い名前を保持しています。

科挙も採用していません。日本語をローマ字化する運動も潰れました。なによりも天皇制が続いている。日本は、信念なくすべてを外国に合わせているように見えて、ひどく頑固で根底でずっと一貫している国でもある。つまり、改革に開かれているよ<sup>②</sup>うに見えてきわめて保守的な国でもあるわけです。

日本は日本でしたたかだったということです。ただ、ぼくたちはその先人たちの力を忘れ、うまく使えなくなっています。

## 「空気」は訂正できるか

どうすれば訂正する力を取り戻すことができるのでしょうか。

身近な例から考えてみましょう。現代日本で改革の障害となっているのは、つねに「空気」、つまり社会の無意識的なルールです。

この空気なるものは、みなが他人の目を気にするだけでなく、同時に気にしている他人もまた他人の目を気にしているという入れ子の構造をもっているのです。とても厄介です。たとえば、コロナ禍が終わってもマスクをなかなか外せないという話題がありました。これは、単純に周りのひとから「マスクをしろ」という圧力をかけられ、怖いというだけの話ではありません。

もしかしたら、周りのひとも本音ではマスクを外したいのかもしれない。けれども、彼らが「他人がどう思っているかわからないから、まだ外すのは控えよう」と思っているかぎり、自分だけマスクを外すわけにはいかない。実際にはみながマスクを外したいと思っていたり、無意味だと感じていたりしたとしても、相互の監視が存在するためだれもが社会の無意識的なルールにしたがってしまう。これが空気の問題です。

その結果、いつまで経<sup>た</sup>ってもだれもマスクを外すことができない。と思いきや、ひとたび一部のひとがマスクを外し始めれば、こんどは逆に、花粉症などでマスクが必要なひとを含め、だれもが外さなければいけないような気持ちにされてしまう。その変化の切れ目がなんなのか、われわれはわからないし、またそれをコントロールすることもできない。

このような厄介な構造をもつ規範意識を、どのようにしたら「訂正」できるのでしょうか。

### 『「空気」の研究』という空気

空気については、評論家の山本七平<sup>やまもとしちへい</sup>による『「空気」の研究』がコロナ禍で再注目されました。1977年に刊行された本ですが、昔から日本人は空気に支配されているという文脈で引っ張り出されたわけです。

ところがこの本を読み返すと、じつは空気という言葉は、いまのような相互監視という意味では使われていません。

同書の中心になっているのは「臨在感的把握」と呼ばれる現象です。ふつうの学問的な言葉で言うと、ある種のフェティシズム<sup>(注1)</sup>です。日本人はアニミズム<sup>(注2)</sup>とフェティシズムが強いから、たとえばいちど「コロナが悪」ということになったらみなそれを呪物のように扱ってしまい、あまり議論ができなくなるということです。

「山本七平が」と喧伝<sup>けんでん</sup>されているわりに、山本七平は実際はその話をしていない。これは今回確認してみて虚を衝<sup>つ</sup>かれました。戯画的に言えば、『「空気」の研究』の内容さえも空気で決ま<sup>つ</sup>ってしまっている。<sup>③</sup>

ちなみに、『「空気」の研究』はいま読むと問題含みな本でもあります。刊行された当時、日本ではイタイイタイ病や自動車の公害が社会問題になっていましたが、山本は懐疑的でした。窒素酸化物は有害か無害かわからないし、カドミウムも有害か無害かわからないのだと記しています。

当時「カドミウムは無害だ」と主張し、実際にカドミウム棒を舐めた学者がいたらしいのですが、その話題に紙面を割いています。『「空気」の研究』は古典ではありますが、気をつけて読まなければなりません。

## 空気批判が空気になる

とはいえ、山本の議論がなにも参考にならないわけではありません。

山本は「水」について興味深いことを述べています。盛り上がり「水を差す」と言うときの「水」です。この国では、空気に水を差していたと思ったら、水を差すこと自体が空気になっていく。だからいつも空気と水が循環している——。そんな議論で彼の本は締めくくられています。

これはじつは当時の左翼に対する批判です。「かつては軍国主義の空気があった。左翼は戦後そこに水を差すようになったが、しばらくしたらこんどはその水が新しい空気になって、言論が左翼に支配されるようになった」という話です。

『「空気」の研究』は半世紀前の本ですが、これはいまでも通用する指摘です。メディアでちやほやされる知識人が現実にはぜんぜん力をもたない現状は、おそらくこの空気と水の逆説に関係しています。

空気に抵抗しなければいけない。ルールチェンジをしなければいけない。そう主張するひとは多い。けれども、この国では、そのような主張（水）がそのまま受け取られるのではなく、すぐに「そういう主張をするひとが現れた」という新たな空気の問題として理解されてしまう。つまり、『「ルールチェンジをしなければいけない』と発言するという新しいルールでゲームをするひと』という受け取りかたをされてしまう。

そうすると、こんどはその新たな問題提起に考えなしに追従するひとが現れてしまう。いくら水を差しても、すぐそれが新たな空気になってしまう構造があるわけです。ひらたく言えば、権力批判をしているひとこそ、空気を読むようになる構造がある。

## 日本では脱構築しか有効ではない

これは重要な指摘です。空気は空気批判もすぐに空気に変えてしまう。日本の閉塞感の原因はそこにある。

だとすれば、そういった空気＝ゲームを変えるためには、空気から素朴に脱出しようとするのではなく、同じ空気＝ゲームのなかにいるようでありながら、ちょっとずつ違うことをやることによって、いつのまにか本体の空気＝ゲーム自体のかたちが変わ

わってしまうといった、アクロバティックなことをやるしかありません。

言い換えればこういうことです。空気が支配し、水もまたすぐ空気になる日本においては、よかれ悪しかれ、ものごとは「いつのまにか変わる」ことしかありえない。明示的に「変えましょう」と言っても、その水自体が新たな空気を生み出してしまうからです。だとすれば、その「いつのまにか」をどう演出するかが課題になる。その課題に答えるのが、この本の主題である訂正する力なのです。

つまり、空気が支配している国だからこそ、いつのまにかその空気が変わっているように状況をつくっていく<sup>④</sup>ことが大事になる。

じつはこれは日本だけの話でもありません。この状況認識はジャック・デリダというフランスの哲学者が唱えた「脱構築」という考えかたに似ています。

デリダは、表面上はすごく難しい哲学書を書いている哲学者です。だからふつうはこういう文脈では言及されません。

けれども彼はじつは、伝統的で保守的なルールに則<sup>のっと</sup>っているように見せかけつつ、それを深く追求していくことによって、ヨーロッパにおける哲学の型を根本的に変えてしまうといった試みをして、それが評価されているひとなのです。哲学のかたちを「いつのまにか」変えてしまうという試みを、哲学の方法として提示した。そのようなデリダ的、あるいは「脱構築」的な手法は、日本においても実践的に有効だと思います。

というよりも、日本では脱構築しか有効ではないと言うべきかもしれません。正面から既存のルールを批判しても力をもたない。ルールを訂正しながらも、その新しさを前面に押し出さず、「いや、むしろこっちこそ本当のルールだったんですよ」と主張し、現在の状況に対応しながら過去との一貫性も守る。そういった両面戦略が不可欠となります。

## 訂正しない猪瀬直樹氏

ところが、現在の日本人はこの訂正する力を失っている。東京五輪をめぐる混乱を思い出してみましょう。

五輪では夏の暑さが問題になっていました。東京都知事として五輪を招致し、多く

の批判に晒<sup>さら</sup>された作家の猪瀬直樹<sup>いのせなおき</sup>さんは、五輪開催前にぼくに対談したときに「東京の夏は五輪に適している」と主張したことがあります。

どう考えても過酷な気候だと思うのですが、それでも「ほかの国も条件は同じだ」と譲らない。五輪はどんどん経費が嵩<sup>かさ</sup>み、それも問題になりましたが、猪瀬さんはこちらについてもツイッター（現 X）で最後まで「コンパクト五輪のはずだった」と主張していました。これほどわかりやすく訂正する力が失われた例もありません。

猪瀬さんには、『昭和 16 年夏の敗戦』という名著があります。太平洋戦争開戦前、日本政府は「総力戦研究所」というシンクタンクにエリート官僚を集めて日米開戦の帰趨<sup>ききう</sup>をひそかにシミュレーションさせていた。答えは日本必敗だった。にもかかわらず、日本は戦争に突入してしまったという内容です。この歴史と東京五輪の強行は部分的に重なります。

猪瀬さんは、撤退を「転進」、全滅を「玉砕」と言い換えてごまかす、日本的な組織体質をよく知っていたはずです。それでもなぜ訂正できなかったのか。

それはおそらく、猪瀬さんが市民を信頼できなくなっていたからだと思います。猪瀬さんも東京の夏が暑いことはわかっていた。経費が想定以上に嵩んでいることも知っていた。ただ、それをひとことでも言ったら、批判勢力からなにを言われるかわからない。いまの日本では、あるていど影響力のある立場になってしまったら、危機管理上、訂正しない人間にならざるをえないわけです。

これは政治家だけの話ではありません。岸田文雄首相は「聞く力」を標榜<sup>ひょうぼう</sup>していますが、とてもその力が発揮されているとは思えない。でもそれは首相だけの話ではない。いまの日本人は全体的にその力がなくなっている。

「聞く力」は、相手の話を聞き自分の意見を変える力、つまり「訂正する力」でもあるはずですが、けれども、訂正することができないので、聞くこともできない。

官僚型答弁が横行するのもこのことが理由です。官僚だけが悪いのではなく、日本社会全体で聞く力、意見を変える力がない<sup>⑤</sup>のです。「最初に言ったことはまちがっていました」という説明ができない。そんなことをしたら徹底的に攻撃されて、自分たちの計画が潰されると、みな警戒しあっている。

(注1) 呪物崇拜や特定の対象，あるいはその一部を偏愛すること。

(注2) 全てのものに霊魂・精霊が存在しているとし，崇拜する信仰。

出典：『訂正する力』(〔著〕東 浩紀 朝日新聞出版 2023) より抜粋した。出題に際して，原文(縦書き)を横書きとし，その一部を改変した。

問 1 下線部①の記述について，本文に即して具体的に，その意味を 40 字以内で述べなさい。

問 2 下線部②の記述について，筆者が挙げている以外に，あなたが考える具体的な事例を，その背景を含めて 250 字以内で述べなさい。

問 3 下線部③の記述について，本文に即して，その意味を 200 字以内で述べなさい。

問 4 下線部④の記述について，あなたが考える具体的な方法を，事例を含めて 300 字以内で述べなさい。

問 5 下線部⑤の記述について，筆者の主張に対するあなたの考えを，賛成，反対も含めて 250 字以内で述べなさい。



(裏)

令和7年度個別学力検査等

## 問題訂正等用紙

科目名〔小論文（医学科）〕 No.〔 ① 〕

問題冊子に訂正があります。

解答用紙に訂正があります。

補足説明があります。

7頁 問5

(誤) . . . あなたの考えを、賛成、反対も  
含めて250字以内で述べなさい。

(正) . . . あなたの考えを、250字以内で述  
べなさい。